



子ども水辺安全講座 導入の手引き

教育機関版 -



平成 10 年 7 月の文部科学省のアンケートで、自然体験活動の多い子どもの方が社会規範が高いという結果が明らかになりました。また、平成 9 年に河川法が改正されたことで、「水辺に子どもの賑わいを」取り戻すことが推進されるようになりました。

しかし、これまで数十年の間、様々な理由から川から人が遠ざかっていた結果、水辺の危険性やその回避の知識および技術などの伝承が途絶えてしまっているのが実情です。

そこで、当法人では平成 12 年より、特に子どもを楽しく安全に水辺に誘うことができる指導者を養成するためのカリキュラムを作成し、これまでに 2000 人近くの指導者を養成してきました。そして、子ども向けにはセルフレスキューを教える「子どもの水辺安全講座」のプログラムを開発し、当法人に登録する指導者が全国各地域で楽しく安全な水辺活動を推進しています。

当手引きは、学校の授業や公民館活動等において水辺での活動が開催される前に、「子ども水辺安全講座」を導入する手引として活用頂ければ幸いです。

平成 19 年 6 月

NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会 (RAC)

子ども水辺安全講座



小中学生を対象に、川や水辺で楽しく遊ぶためのコツや危険回避の訓練を RAC と地元の関係者が講師になっておこないます。ライフジャケット着用などの基礎知識から、講義、救助訓練、カヌー、Eボート、川流れ、魚とりなどのプログラムを目的と日程に合わせて組み合わせることができます。川や水辺を素材とした総合的な学習の一環として、また、教育委員会や市民団体が主催する野外体験活動として半日から一泊二日のプログラムを全国の川でおこなっています。



講義



川の危険な場所の説明。ライフジャケットやスローロープの使い方などをわかりやすく説明します

Eボート



安定性の高い、10人乗り手漕ぎゴムボートを子どもたちが組立て、川下りや川あそびに使用します



救助

救助する役とされる役に別れ、水難救助用のスローロープを使った救助法を体験します



川流れ

ライフジャケットを着用し、流れる姿勢（フットファースト）を維持して安全な川流れを体験します



魚とり

川に生息する魚類の説明を受けた後、仕掛けを自分で作り、魚釣りを体験します

子ども水辺安全講座 2005年実施実績

実施場所	主催団体	実施日
多摩川 / 東京都大田区	大田区立矢口小学校	9月12日、10月7日
学校内 / 東京都世田谷区	世田谷区立砦南小学校	7月19日
長良川 / 岐阜県岐阜市	NPO 法人長良川環境レンジャー協会	7月23～24日
高津川 / 島根県日原町	日原カヌークラブ	7月3日～ 全9回
天竜川水系 / 長野県泰阜村	NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター	8月2日～ 全4回
長良川 / 岐阜県岐阜市	NPO 法人エヌエスネット	7月2日～ 全6回
いたち川 / 富山県富山市	NPO 法人地域交流センター	11月15～16日
小貝川 / 茨城県取手市	NPO 法人小貝川プロジェクト21	7月25日～ 全5回
那珂川 / 栃木県烏山町	栃木カヤックセンター	7月28日～ 全5回
材木座海岸 / 神奈川県鎌倉市	ama 水辺の自然文化研究所	8月8日～ 全5回

1. 青少年教育における子ども水辺安全講座の位置付け

(1) 環境教育の場としての川

上下水道が発達する以前の我が国は、「水」は貴重な資源として大切に扱ってきました。生活雑排水を川へもどす際は、地面に掘った穴に流して過した水だけを流したり、極力ゴミなどを取り除いていました。その水がいずれまた自分に帰ってくることを認識していたからです。しかし、現在「水」は我々のなかで消費物と化しています。蛇口をひねればいくらかでも水が手に入り、お金を払っているのだからどんな使い方をしてもかまわないという意識があります。炊事・洗濯・お風呂などに使う洗剤は自分たちの生活に都合のいいものを優先し、それが水辺の生態系への悪影響を及ぼす恐れのあることに気づく人は少ないのが現状です。

環境教育の目的は、「人と環境の関係について理解を深め、責任ある行動をとれるようにすること」です。環境問題解決のための理念である“Think Globally Act Locally（地球規模で考え、足もとから行動を）”に照らせば“身近な川は”川や水の問題について知識としてではなく、身体で感じ、学ぶことができる絶好の場です。「知ることは感じることの半分も重要でない」とレイチェル・カールソンが指摘するように、日頃縁遠く感じている川に実際に入る体験活動をすることによって、真の環境教育、すなわち川を好きになり、ひいて地球規模の環境に配慮した生活の出来る人を育成することが出来ると期待されています。

(2) 心身の健全な発達訓練の場としての川

文部科学省が発表した「子ども体験活動に関する調査」(平成10年7月)では自然体験活動の多い子どもほど、「友達が悪いことをしていたらやめさせる」「バスや電車で席を譲る」などの「道徳感・正義感」が強いという結果が明らかとなっています。一見すると穏やかな川でも一歩水の中に入ればそこは大自然そのものです。川は変化に富み、“ひやっ”とする場面も多々あります。反面、その川の特徴こそが人の生きる力を育てるのではと考えられています。特に、川の流れなど自分の力だけではどうにもならない自然現象に遭遇したとき、社会規範を司る恐竜脳といわれる脳幹が刺激され、人への思いやりや弱者を労わるといった意識が芽生えるといわれています。

「子ども水辺安全講座」は、様々な教育的効果が考えられる「川」へ近づく前に、川のどこが危険なのか知り、自分の身を守る方法を体験を通じて学習することを主な目的としています。

(3) 基本プログラム

- 講座 1. 川の危なさ 2. 流れの特徴 3. 自分を守る方法 4. 誰かが溺れてしまったら
実習 1. ライフジャケットの使い方 2. スローロープの掴まり方
3. 川の魅力体験（釣り、カヌー、水遊び等）
4. 川に学ぶ（人と人、人と自然のつながり）
ふりかえり 感想文、発表等

子ども水辺安全講座事例 Vol. 1(総合的学習等支援事例)

- 日 時:第1回—平成 15 年 6 月 6 日(金)・第2回-7 月 4 日(金)
- 場 所:大田区立嶺町小学校及び多摩川
- 対 象:小学 5 年生 約 80 名
- 学 校:東京都大田区立嶺町小学校

□第1回(教室・多摩川) / 事前安全講習(120分)

子どもと川に出る前に、当日サポートする教職員と地域・PTAの方々を対象に水辺の危険や回避法について講義を行った。その後、実際に子どもと活動する現場に出てライフジャケットやスローロープ(救助用ロープ)の使い方を実習。またライフジャケットの漂流体験や、渡河ルートの下見も行った。

□第2回(体育館・多摩川) / 安全講習(180分)

5年生児童 77名、教員 23名のほか、地域・PTAの方々、講座のサポーターとして参加した日本体育大学カヌー部の学生約20名がセルフレスキュー講習を受講した。その後川で下記の体験を行った。

1. 対岸まで歩く
2. 到達地点から下流まで流れ体験(約30メートル)
3. 流れた後、クラス単位でスクラムを組んだり、人間ダムを作るなどして団体で中洲まで移動。
4. 中洲からスタート地点まで歩いて戻る。



子ども水辺安全講座事例 Vol. 2(総合的学習等支援事例)

- 日 時:第1回—6月24日(火)、第2回—7月11日(金)、第3回—7月29日(火)、
第4回—8月8日(金)、第5回—9月12日(金)
- 場 所:上片貝小学校、プール、信濃川
- 対 象:小学5・6年生(10名)
- 学 校:新潟県小千谷市立上片貝小学校

□第1回(教室) / 川の魅力(50分)

川の楽しさ、川の危険について、またこれから行う水辺の安全講習について説明。

□第2回(体育館・プール) / 安全講習(160分)

- ・ 体育館にて、川についての基礎知識を講義。その後、スローロープの投げ方、救助のされ方、PFDの着用の実習をした。・ 当日は雨天だったため実習を学校のプールで行なう。全員でプールの中を歩いて流れを作り、PFDでの擬似流れ体験を実施。
- ・ セーフティスイム、アグレッシブスイムを体験。水泳が苦手でもPFDを着用することで楽に泳げることを実感していた。・ プールサイドでスローロープの投げ方を再度実施した。



□第3回(信濃川) / Eボート川下り体験(240分)

- ・ 5・6年生を2つのチームに分けて2艇のEボート(10人乗りの手漕ぎボート)で川下りを実施。ボートの組み立て解体も子どもたちで行った。
- ・ 川の中から眺める景色、緩急のある川の流れ、水辺の生物を観察。



□第4回(信濃川) / 川での安全講習(実習 120分)

- ・ 第2回目に来れなかった信濃川での実習を行う。川の流れや、フェリーグライドで目的地まで泳ぐことなどを説明。
- ・ 対岸の『鯨の背』と呼ばれている岩場までフェリーグライドで到達。泳ぎの苦手な児童は講師がサポート。
- ・ 対岸での活動・・・洞窟探検、洞窟から川へのダイブ、小魚の捕獲、生き物の足跡の観察、岩石・地層の観察など。

□第5回(信濃川) / 川での安全講習(実習 120分)

今回はPFDを着用せず、シュノーケルとフィンを使用して川底の観察と川の横断を計画。装備後練習をしたが、川が前日の雨で濁っていたのと、シュノーケルを上手く使いこなすことが出来なかったため、PFDとフィンを用いて川を往復した。



2. 自然体験活動としての「子ども水辺安全講座」の位置付け

当講座は前記のように総合的学習の時間に組み込んで実施することも可能ですが、公民館活動等で長い時間を確保できる場合などは、当講座そのものを目的化して開催することを推奨しています。推奨する実施科目と時間は下記の通りです。

(1) 講座実施項目(基本時間)

科 目		形 式	時 間
水辺で遊ぼう	水辺の魅力に気づく 水辺で起きる事故に気づく	講 義	1
水辺の不思議	川・池・湖・海の特徴 流れる・水圧がある・冷たい	学科・実技	2
自分を守る	しておきたいこと・してはいけないこと 助かるための方法 誰かが助けを求めているら	学科・実技	3
水辺から学ぼう 身につけたことを活動に活かす	活動の楽しさを経験する 安全な活動が実際にできる 全体のふりかえり	学科・実技	4
合 計			10

(単位：時間)

(2) サンプルスケジュール

講座時間数 10時間

1日目 (5時間)

9:00 集合・オリエンテーション
 9:30 アイスブレイク
 10:00 「水辺で遊ぼう」
 11:00 「水辺の不思議1」
 12:00 昼食
 13:00 「水辺の不思議2」
 14:00 休憩・準備
 14:30 「自分を守る」
 17:30 終了・風呂
 18:30 夕食
 19:30 ふりかえりと明日の予定
 20:00 自由時間・就寝準備
 21:30 就寝(年令に応じて調整)

2日目 (5時間)

6:30 起床・散歩
 7:30 朝食
 8:30 準備
 9:00 「水辺が教えてくれること1」
 12:00 昼食
 13:00 「水辺が教えてくれること2」
 14:00 ふりかえり・かたづけ
 13:00 終了

(3) 講座実施にあたって

活動例について

サンプルスケジュール及び各活動例は、講座の実施基準となるものではなく、プログラム展開の方法や実施項目の内容について、参考としていただくために例示したもので、必ずしもこのとおりである必要はありません。

実施環境や子どもたちの状況によって、このような内容を10時間で十分に行うことが出来なければ、通常の活動に参加する中で具体的に学べるよう担当となるRAC指導者が配慮します。

子どもの発達年令について

活動に際しては、講座の内容を参加者の発達年令に応じて工夫します。ちなみに、以下に示した「活動の例」では、3・4年生以上を前提にして例示しています。

発達年令の考慮については、理解する能力・持続力などが上げられるが、体力においても同様に、主に持久力や、環境ストレスへの身体的応答（体温の上昇・低下など）について、年令差による体格の違いを考慮することとなっています。

参考例:大人との約束ごとが認識される程度は?

- | | |
|---------|-------------------------|
| 6・5年生以上 | 活動中も普通程度に理解している |
| 3・4年生 | おおそ理解し活動するが、熱中すると忘れることも |
| 1・2年生 | 活動に熱中すると、すぐに忘れてしまう |

実施方法の推奨例

この講座は独立した安全講座として、必要なカリキュラム4項目を実施時間10時間以上で実施し終了することとしています。次のような形態での実施方法も推奨しています。

通常の活動プログラムの始めもしくは必要な個所に挿入して実施する。

活動プログラム全体の流れの中に折り込んで実施する。

どちらの方法も、水辺の安全講座規定の内容と時間数が網羅されていることを講座実施計画書において示し提出することが求められています。

(4) 基本カリキュラム講座実施例

実施概要

活動形態	1泊2日キャンプ滞在型(チャレンジ型)
河川環境	一級河川中流
参加者	30名
スタッフ	17名(リーダー8名・サブリーダー6名・ジュニアリーダー3名)

講座の概要

この講座は、川・水・自然のことを知り、今後、川で活動するにあたってのルールを学んでもらうためのものである。

1日目は、水の性質、生物の生態を座学と実際の観察を通して学び、川に対する興味を引き出した後、セルフレスキューについて実践的に学ぶ。

2日目は、午前中 カヌー操船の基本や飛び込み遊びなどを体験した後、流れのある場所で飛び込みや「かっぱの川流れ」で学んだことの仕上げを楽しみながら行う。

講座の工夫

子ども達から活動への興味や積極性を引き出しながら進める。

実際の活動の中でルールを学んでもらう。

複数のアクティビティーにチャレンジしてもらい、川遊びの楽しさ魅力を伝える。

安全上の留意点

天候の有無に関係なく常に体を動かしているので水分補給をさせる。

定期的に体調チェック(参加者・スタッフ共に)をする。

常にバックアップ体制をとっておく。

前日・当日の天候チェックをする。

最寄りの病院・消防署と連絡が取れるようにしておく。

親・家族への連絡先を調べておく。

時間割と内容

1日目（5時間）

- 9:00 集合・オリエンテーション
- 9:30 アイスブレイク
- 10:00 「講義 水辺で遊ぼう」・・・水の流れ・川底の形・水の力
- 11:00 「講義 水辺の不思議1」・・・生態系・川の生き物
- 12:00 昼食
- 13:00 「実技 水辺の不思議2」・・・水質調査・水生生物
- 14:00 「講義 自分を守る1」・・・危険な場所・川でのルール
- 15:00 「実技 自分を守る2」・・・安全装備・川での泳ぎ方・スローロープ
- 17:00 シャワー・テント設営・買い物・野外調理（実習）
- 20:00 ふりかえりと明日の予定
- 20:30 自由時間
- 21:30 就寝

2日目（5時間）

- 6:30 起床・テントの片付け（実習）
- 7:30 朝食・準備
- 9:00 「実技 水辺が教えてくれること1」・・・パドルの使い方・カナディアンカヌー・飛び込み
- 12:00 昼食
- 13:00 「実技 水辺が教えてくれること2」・・・流れの中に飛び込み・アクティビティ・1 km川流れ
- 15:00 ゴミ拾い
- 15:30 ふりかえり・アンケート
- 16:00 終了

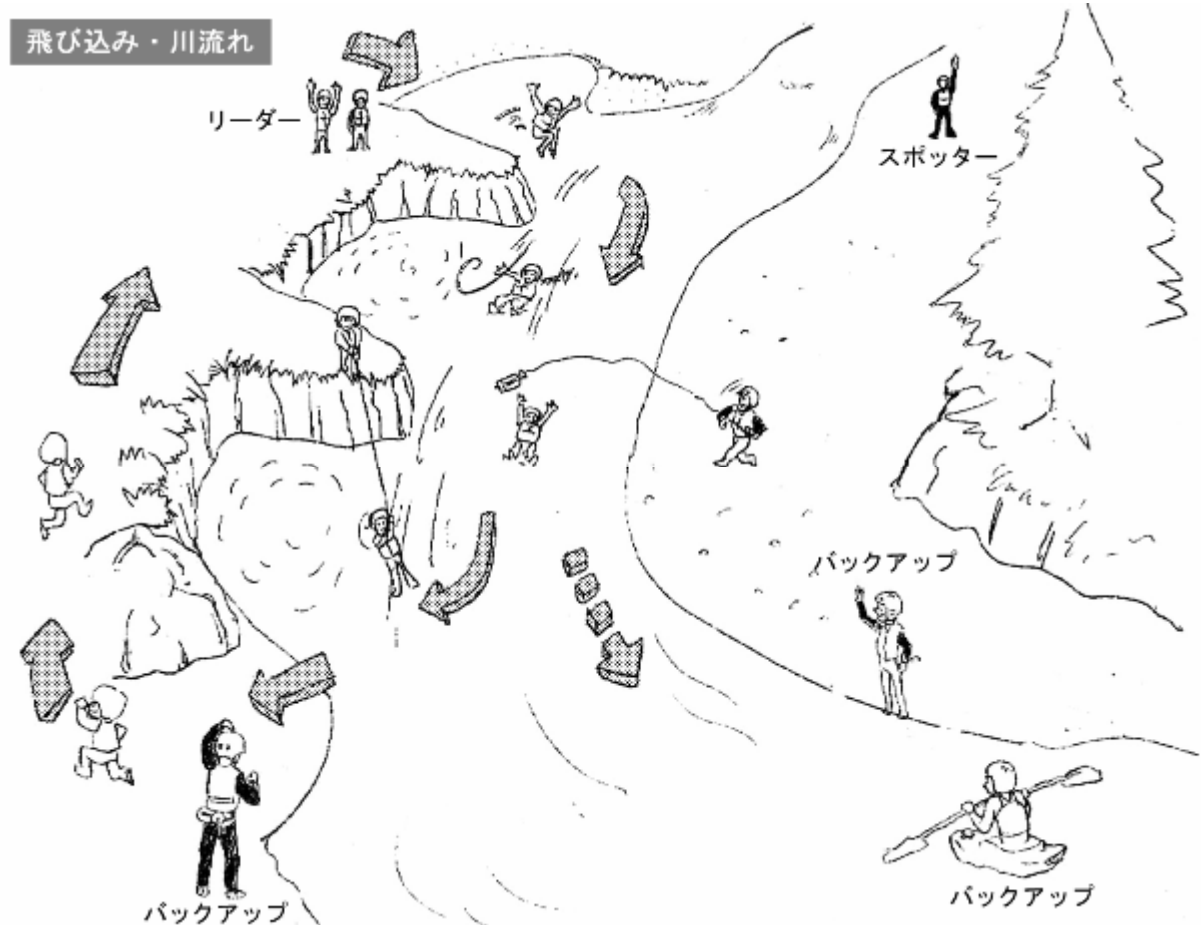
必要な用具

カヌー・飛び込み・川流れ

マイク	1	
スローロープ	20	
カヌー	8	
パドル	30	
PFD	50	各サイズ
ウェットスーツ	50	各サイズ
ヘルメット	50	
タープ	3	
テント	6	
ランタン	6	
炭台・アミ	4セット	
炭	20kg	
クーラーボックス	3	大・中・小
ウォーターボックス	20リットル	

うちわ	10	
ゴミ袋	50枚	
はし・皿	50セット	
ファーストエイドキット	2	
エンピツ	30	
アンケート用紙		人数分

スタッフ配置



講座開催にあたっての手順

講座の企画会議を開く

活動内容と対象者、日時・安全な場所・適切な人員・道具・全体の安全管理について話しあう。



下見を行う

場所の特性・実施時期を考え合せながら危険性の予見を行う。これを記録しスタッフ会議で活かす。スタッフ会議にて下見の結果と実施内容・スタッフのレベルを考え合わせ、また実施場所の危険性についての予見をしっかりと行ったうえで、場所・時期を確定する。



実施内容の決定

スタッフ会議において必要な事柄をシミュレーションしながら、講座の企画内容をより具体的ににする。緊急時の対応フロー・役割分担を作成。実施できなかった場合の代替案も作成する。



講座の準備

講座の企画内容にそった諸事項の準備・調整を行う。参加者を把握する。実施場所で実際にシミュレーションし必要なら修正を加える。



実施前のスタッフ会議

全ての準備・調整を終えたら改めて、講座の全体像をスタッフ全員で共有する。



実施直前の確認

1週間前ぐらい前から水辺の状況を天候と合わせて調べ、当日のコンディションを予測する。前日に最終のスタッフミーティングを行い、最終確認を行う。



「子どもの水辺安全講座」実施

計画にしたがって実施。実施後にふりかえりミーティングを行い、この記録を残し、今後の企画に活かす。

計画は、スタッフ全員が共有できるよう配慮する。企画作りの過程では、スタッフ全員が参加していることが望ましい。

3 . Q & A

Q1 . RACとはどのような組織ですか。

A1 . 川に学ぶ体験活動協議会を英語でRiver Activities Councilといいます。その英語の頭文字をとり通称RACと
いいます。平成10年の河川審議会小委員会答申「川に学ぶ社会に向けて」を具現化するために、平成12年9月に
市民団体や公益法人等の協議会として設立されました。川での体験活動を支援・推進するあらゆる活動を、時代
に合わせて総合的に展開していこうというのがRACの活動です。特に、安全に楽しく体験活動を引率する「指導
者養成」や、「子どもの水辺安全講座」などの教育活動に力を入れています。RACは平成17年12月にNPO法人と
して内閣府より認証されています。

Q2 . 「子どもの水辺安全講座」を開催するための方法を教えてください。

A2 . 開催するには下記の通りいくつかの方法があります。

学校の総合的学習等の時間の中で行う場合

当法人より最寄りの指導者養成団体またはトレーナーを紹介します。(もし該当者がいない場合には当法
人の事務局で直接対応します。)その方々と相談しながら、授業の予定に沿って無理の無いプログラムを構
築していきます。ライフジャケット着用訓練などの実習を川で行うことが無理であれば、プールで実習するこ
とを推奨します。

公民館活動や子ども会活動の一環として行う場合

基本的には と同じですが、複数日での開催が可能であれば、当法人の推奨する講座実施項目及びプロ
グラム例に沿ってそれぞれの活動目的を達成できるように構築していきます。

Q3 . 講座の開催にはどれくらいの経費が必要ですか。

A3 . 依頼する指導者や実習内容、開催時期によって違いますが、交通費以外に1回の講師謝金として2万円程
度をお支払いしているところが多いようです。ライフジャケットやヘルメット、スローロープは「子どもの水辺サポート
センター」(<http://www.mizube-support-center.org/top.html>)が送料のみで無料で貸出を行っています。なお、事
前打合せが必要な場合には、その際の経費も考慮されることをお願いします。

Q4 . 予算がないのですが、何か支援の仕組みがありますか。

A4 . 当法人では「子どもの水辺安全講座」等開催に支援を行っています。支援枠には限りがありますが、支援対
象はRACの正会員に限定しています。当法人の最寄りの正会員で指導者養成団体もしくはトレーナーに相談頂
き、当法人に「子ども水辺安全講座」の支援申請をして頂いてください。その他、「河川整備基金」という助成制度
では、学校の活動に10万円の支援が受けられものがあります。申請締切は毎年1月中ですので詳細は河川環境
管理財団のHP(<http://www.kasen.or.jp/>)をご参照ください。

[連絡先]

NPO法人川に学ぶ体験活動協議会 事務局
〒104-0033 東京都中央区新川 2-10-6-703 号
TEL.03-5542-7577 FAX03-5542-7578
ホームページ <http://www.rac.gr.jp/>
E-Mail rac@rac.gr.jp